

# アントウェルペンの興隆と銅Ⅱ香料交易

中 沢 勝 三

## はじめに

十六世紀の国際経済において銅は特異な位置を占める交易品目であった。銅は、種々の金属製品（戦略的には青銅砲の鑄造が重要）に用いられただけでなく、十六世紀に入ると金銀と並んで鑄貨としても用いられるようになった。<sup>(1)</sup> そのため君侯の中には銅貨で税を徴収するものも出、さらには自身で銅鉱山の経営に乗り出すものさえ現われてきた。もとよりこうした事業には大商人・金融家の利害が絡むケースが多く、莫大な信用供与と引きかえに銅山の経営権が彼らに譲渡される事態も生じて、銅の掌握がヨーロッパの権力外交の一つの鍵ともなったのである。<sup>(2)</sup>

そのような事態の進展に大きく関わっていたのが、経済史上よく知られた、いわゆる「フッガー家の時代」と称される南ドイツ鉱山業の繁栄である。この南ドイツ鉱山業は、凡そ十五世紀中頃から十六世紀中葉に至ってアメリカの貴金属の流入が本格化するまで、ヨーロッパの最も主要な銀銅の供給源であった。<sup>(3)</sup>

ところで、アントウェルペンはこの銅交易においても隔絶した位置をもつ中心地であった。<sup>(4)</sup> そこで本稿は、ヨーロッパ内外の銅交易の把握をふまえつつ——香料交易も視野に収めて——、銅がいかなる国際経済の動向を背景にしてアントウェルペンを介して流れたのかという問題を検討し、十六世紀ヨーロッパの国際経済の実態把握とアントウェ

ルベンの市場の機能についての一準備研究たらしめるものである<sup>(6)</sup>。

注(1) 銅は、各種の容器(醸造、蒸留、料理用)、屋根板、料理用具、装飾品(ベル、像等)として、また低階層の人々の装身具として幅広く用いられた。K. Glamann, 'European trade 1500—1700,' in: C. M. Cipolla, ed., *The Fontana Economic History of Europe*, 2, Glasgow, 1974, pp. 490—492; id., 'The changing patterns of trade,' in: E. E. Rich and C. H. Wilson, ed., *The Cambridge Economic History of Europe*, V, London, 1977, pp. 207, 240—245. また十六世紀の銅の生産と交易全般について、E. Westermann, *Das Eislebener Garkupfer und seine Bedeutung für den europäischen Kupfermarkt 1460—1560*, Köln und Wien, 1971; H. Kellenbenz, hrsg., *Schwerpunkte der Kupferproduktion und des Kupferhandels in Europa 1500—1650* (Kölner Kolloquien zur internationalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Band 3), Köln und Wien, 1977 (以下本書を *Schwerpunkte* と略記)を参照。なお、本稿では単に「銅」という場合でも、加工原料としての精錬銅だけでなく、銅製品全般をも含んだ広い意味で使っている。

(2) K. Glamann, 'European trade', pp. 490—492; id., 'The changing patterns of trade', p. 241; H. Kellenbenz, 'Die Rolle der Verbindungsplätze zwischen Spanien und Augsburg im Unternehmen Anton Fuggers', in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 65, 1978, SS. 3—4.

(3) 南ドイツ鉱山業について、大塚久雄『近代欧州経済史序説』(著作集第Ⅱ巻、一九六九年)三三—三四頁、参照。

なお、金銀と並んで銅も西インドから流入している。K. Glamann, 'The changing patterns of trade', pp. 214, 246, 282.

金銀の流入については、大塚、前掲書、四七一—四八頁、参照。但し大塚では銅の流入は看過されている。銀の流入が本格化するの是一五四〇年代以降のことである。J. U. Nef, 'Silver production in Central Europe, 1450—1618', in: *Journal of Political Economy*, 49, 1941, p. 575. ところで南ドイツ銅の産出額は十六世紀後半に急速に落ち込み、替ってスウェーデンが十七世紀最大の供給地として浮上する。K. Glamann, 'European trade', pp. 491, etc.; id., 'The changing patterns of trade', pp. 189, 494ff.; K. Kumelin, 'Staat, Kupfererzeugung und Kupferausfuhr in Schweden 1500—1650', in: *Schwerpunkte*, SS. 241—259. *Schwerpunkte* の SS. 413—416 にはスウェーデンの大鉱山の生産額のグラフ(一五四〇年—一七九〇年)と一五八二年から一六二〇年までのストックホルム港の輸出高他が収録されている。また一七世紀の日本産銅の及ぼすヨーロッパ市場への影響については、K. Glamann, 'Japanese copper on European market in the 17th century', in: *Schwerpunkte* を参照。

(4) H. Kellenbenz, 'Europäisches Kupfer, Ende 15. bis Mitte 17. Jahrhundert. Ergebnisse eines Kolloquiums,' in: *Schwer-*

punte, S. 335. アントウェルペンに次ぐ市場はフランクフルト・アム・マインであった。Mollenbergによれば前者が銅交易の $\frac{1}{2}$ を、後者が $\frac{1}{3}$ を扱ったという。なお、交易の流れも性格も本稿の課題とするものと異なるが、アントウェルペンはアメリカ産銀交易の中心地でもあった。F. Brandel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2. éd. revue et augmentée, 1966, tome 1, pp. 436—440.

(5) その意味で本稿は、拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆——繁栄の契機をめぐって——」「一橋論叢」七五の二、一九七六年、で扱った課題の一面を時代的視野を拡げて精査するものである。なお、前掲拙稿で立論した、政治的契機を重んじる立場は現在も変わりがないが、本稿では視角を経済史的分析に限った。なお、前掲拙稿での論拠をほぼ追認する次の研究が現われた。R. Van Uyten, 'Politiek en economie: de crisis der late XV<sup>e</sup> eeuw in de Nederlanden,' in: *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 53, 1975.

# 一

十五世紀末から十六世紀初頭にかけて彗星の如くヨーロッパ経済の地平に浮かび上がったアントウェルペン市場の興隆の経済的契機について、ファン・ハウテによって唱えられ、次いでファン・デル・ウェーに発展的に継承された通説的学説がある。この学説によれば、その興隆は、深く十五世紀のうちに進展した内外の経済の動きに規定されながらも、十五世紀末の四半世紀程のうちに、いわば一挙にアントウェルペンを国際市場に押し上げた三つの際立って特徴的な交易が存在した。その「三支柱」とは、イギリス人による毛織物交易、ポルトガルの香料交易、それに南ドイツ商人の手になる銀銅交易である。<sup>(6)</sup>このうちイギリス毛織物交易が十五世紀前半から次第に同市場との結び付きを強めていったのに対して、<sup>(7)</sup>南ドイツ産の銀銅交易が史料の上で確かめられるようになるのは一四九〇年代中頃以後（商人の進出は八〇年頃から）のことであり、またポルトガルのアフリカ回航の香料が最初にスヘルデ河畔に陸揚げされたのも十六世紀元年（一五〇一年）であったというように、これら三支柱には年代的にみて微妙な比重の相違が

みられたのである。<sup>(8)</sup>

そればかりではない。ファン・ハウテらの学説においてさらに特徴的なのは、二支柱、つまり南ドイツ銀銅とポルトガルの香料交易とがこのアントウェルペンを舞台として相互に結びつき、その結合が他の諸交易に対して劇的な触媒効果を及ぼしたという点にあった。<sup>(9)</sup>

そこで以下本節において、この二つの交易の結び付きについての研究史を少しく辿ってみることにしたい。

アントウェルペン市場にあって銅はどのような世界交易の流れに参与していたと考えられていたのだろうか。

まず、アントウェルペンの銅交易をポルトガルの植民地交易と関係づけたのはデニウスである。『十六世紀のアフリカとアントウェルペン交易』<sup>(10)</sup>という著作で彼は次のようにいっている。「アフリカの産物は、島嶼と北アフリカのものは直接アントウェルペンへもたらされ、ブラック・西アフリカの産物はリスボンを介して間接的に（同市に——引用者）もたらされた。ドイツ人は、ブラック地域（黒アフリカ——引用者）向けの最主要的支払手段 *ruiniddel* とするべく、中部ヨーロッパの銅と他の鉱産物をアントウェルペンへ持ってきたのである」<sup>(11)</sup>と。さらに、立地上の好条件、後背地との水陸交通網の良さ、情報網の整備、資本調達、取引所と金融組織等の条件を挙げて、その全てを備えているのがアントウェルペンであり、リスボンやセヴィリアもこれらの条件を全ては満たしておらず、「その支配者の寛大な意向」ともあいまって、スヘルデの都市が第一級の商品市場へと興起し、「十六世紀において最主要的なアフリカ植民地産物の市場となった」<sup>(12)</sup>としている。そして、南ドイツ商人が送付する銅、錫、水銀の「莫大な量がアントウェルペン港經由 *over de haven van Antwerpen* アフリカへ輸出された」<sup>(13)</sup>と明言しているのである。それに対してアフリカからもたらされた産物のうちで最も主要なものは甘蔗糖と蜜 *sirope*、次いで重要なのは極東の香料とマラゲッタ（ギニア産胡椒の一種）であったという。しかしこの甘蔗糖と蜜が主にネーデルラント人によって入植され、移

植されたカナリア群島など大西洋岸の島々や北アフリカの産物であったのに対して、ポルトガルによる南のブラック・アフリカ西岸での現地人との交易において最も主要な商品は前記の香料類であり、それに対するヨーロッパの見返り品として第一のものが銅であった。

このようにデニウスは、交易の実態把握の仕方において、アントウェルペン市場での銅と香料交易の結合をすでに示唆する見地に立っているのだ。

その直後、『アントウェルペン史』の第七卷第二部「経済」を著わしたF・プリムスは、地元商人 Claes van Rechtergen に言及し、デニウスの説を受けて、「彼によってドイツとポルトガルの香料対金属の交易 Dutsch-Portugeseche ruilhandel がこの地に確固として打ち建てられた」と注目すべき叙述をしている。

そして、若き日にリスボンに住み、銀、水銀、銅などの金属を商なった経歴をもつアーヘン出身のエラスムス・スヘッツ Erasmus Schetz が香料商 specerijenhandelaar レヒテルヘンの女婿となつて（一五一一年七月婚約）その事業を受け継ぎ、スヘッツ家の創業者として、やがて香料・金属交易と並んで金融業も営なむようになっていくのである（スヘッツ家については第三節で後述）。

十六世紀も進むにつれて、香料も銅も共にその提供者であるポルトガルと南ドイツ商人相互の直接の——あるいはイタリア商人などの外国商人を介して間接の——取引が行なわれるようになっていくが、両商品の会合の端緒期において地元ネーデルラントの商人が先導的役割を果たした点は特筆に価するものである。

こうしてわれわれは一九四〇年のファン・ハウテの論文に辿りつく。彼はこの論文で、ポルトガルとドイツ（初期のライン商人と後の南ドイツ人の役割を峻別しつつ）の両サイドから、両者が香料と銅のそれぞれの交易をアントウェルペンに定置させていった経緯を丹念に追跡している。

まずポルトガルはネーデルラントでの活動の本拠を永くブリュッヘに置き、「市場間の闘い」に際しても直ちにはアントウェルペンに移ろうとはしなかった。だから当初彼らがその植民地産物である象牙やマデイラの甘蔗糖の市場としたのはブリュッヘであった。しかしブリュッヘでの彼らの活動は一四八五年以後確認できなくなり、再び史料に登場するのは一四九四年になって、しかもこのときはアントウェルペンにおいてなのである。そして一四九八年以後この都市で光輝ある活動を開始することになる。ところで、「ブリュッヘではポルトガルの交易は明らかに婦、荷を持たなかったために決して最前線に出ることはなかったが、アントウェルペンは、逆に、幸運にもその競争者が到達しえなかったものになることができた。ポルトガルが植民地に向けて輸出する土台となった商品ジャンル、つまりヨーロッパ第一の金属市場となったのである」(傍点引用者)。のみならず、「この開花を促がした功績」はケルンにも帰せられる。というのは、ケルンはアントウェルペンの国際的な活動を揺り動かしただけではなく、当初ケルンと緊密に結びついていた他の諸都市の商業をアントウェルペンに引き込みさえしたのであって、それゆえケルンが仲介者の役割を解放されたのちも(南ドイツ人が直接進出してきたのちも、の意味——引用者)アントウェルペンとの交易関係を保持したのは当然のことだといっている。

ところでケルンは、初めフランクフルトの大都市を介して南ドイツ諸都市との交易を行っていた。ところが次第に後者の商人がケルン(Ⅱ「ラインの首府」)に進出し、やがてはアントウェルペンを訪れるようになった。一四六五年にニュルンベルクの商社が同市で毛皮とイギリス毛織物の取引をしている。この関係は、南ドイツ商人がアントウェルペンで莫大な量の金属を捌くようになった世紀末に、驚ろくべき飛躍をとげたのである。そして、彼ら南ドイツ商人がその都市にいたことこそ、ポルトガル人を同市に引き寄せた原因であったことは間違いないという。ポルトガルは植民地の産物を持ち込み、ギニアとインドの人々のために銅と銀を買い入れたのであった。こうしてアントウェ

ルベン、ポルトガルにとっても第一の市場となったのである。

ファン・ハウテは、上記の論文の二二年後に、アントウェルペンの繁栄期を鳥瞰した名篇を世に出したが、ここでもその論旨に変更はみられず、はっきりと、ポルトガル王はアントウェルペンに「銅を買い入れる目的で代理人を置くことを決めた。他方で彼は以後（一四九四年以後——引用者）アフリカから積み込まれてきた植民地産物の大部分をその地で売り捌いた」といつている。さらにその後、彼は門下のファン・デル・ウェーの研究成果を受けて、南ドイツ産の銀がネーデルラントに向かった点について、十五世紀後半にそこで銀の評価が高まった点を付け加え、また最新の著書では、ヴァスコ・ダ・ガマのインド到達（一四九八年）によって、インドではヨーロッパよりも金銀比価で銀を高く評価していることが知られた点を挙げて銀輸出のインパクトについて新たな展望をするに至っている。

注(6) 前掲拙稿、一九六一一九七頁、におけるファン・ハウテ説の骨子参照。ファン・デル・ウェーも、「アントワープ商業発展の初期の三支柱 three original supports」という形でファン・ハウテの説を踏襲し、この三者が一五三〇年までの同市場の上昇局面を構成したとしてゐる。H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy* (fourteenth - sixteenth centuries), The Hague, 1963, II, p. 143. なお彼の独自の貢献について、拙稿「繁栄期アントウェルペンの経済的基礎——ファン・デル・ウェーの寄与——」『一橋研究』、一の二、一九七六年、を参照。

(7) 但しイギリス毛織物交易も世紀交替期に後の飛躍の基礎を整えた。拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆」、五九頁。J. Wiegandt, *Die Merchants' Adventurers' Company auf dem Kontinent zur Zeit der Tudors und Stuarts* (Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Band 4), Kiel, 1972, SS. 32—36.

なお、イギリス毛織物交易のサイドからみると、同市場を「選択した」というより「強いられた」という側面が強調されるべきである。この点何よりも、船山栄一「イギリス毛織物工業の構成と海外市場の動向」（高橋幸八郎・古島敏雄編『近代化の経済的基礎』、一九六八年、所収）を参照されたい。

(8) 筆者は同市場の繁栄の契機と構造を考察するに当って、まず諸契機の離合についての年代的、生起を踏まえることが大切であると考え、この点においてもファン・ハウテとファン・デル・ウェーはそれぞれに画期的な貢献をなしたといえよう。

- (9) この点は必ずしもファン・ベウテの創見とはいえない。
- (10) J. Denucé, ed., *Afrika in de XVIde Eeuw en de Handel van Antwerpen* (Dokumenten voor de Geschiedenis van de Handel, II), Antwerpen, 1937.
- (11) *ibid.*, blz. 78 en 79.
- (12) *ibid.*, blz. 78.
- (13) *ibid.*, blz. 80.
- (14) *ibid.*, blz. 25—26, 42. この点次の新文献を参照。F. Mauro, *Le XVI<sup>e</sup> Siècle européen. Aspects économiques*, Nouvelle Clio 32, Paris, 1970, pp. 154—155, 287, etc.; H. Pohl, 'Überseesischer Zucker auf dem Antwerpener Markt,' in: *id.*, *Studien zur Wirtschaftsgeschichte Lateinamerikas*, Wiesbaden, 1976.
- (15) J. Denucé, *op. cit.*, blz. 38.
- (16) デニユスより以前にJ・シントリーダーがこの問題を、ポルトガル王室がその植民地交易用に南ドイツの金属を求めるという角度から論じたことがある。J. Strieder, 'Deutscher Metallwarenexport nach Westafrika im 16. Jahrhundert,' in: *Historische Aufsätze Aloys Schulte zum 70. Geburtstag*, Düsseldorf, 1927. この論文ではポルトガルがアフリカから持ち帰った産物の販路を求めてアントワエルペンへ北上した点は明言していないが、この論文の大部分がそのまま取り込まれた史料集の解説で、新たに、「アントワエルペンの世界交易の地歩は、スペイン、ポルトガル、両者の植民地、イタリア、フランス（の諸地方）と、北部・東部ヨーロッパとの間の商品交換が大規模にこの地でなされた事実によっている」（傍点引用者）といっていることからみて、事実認識としてアントワエルペンの市場の位置を高く評価していたことは間違いない。id., hrsg., *Aus Antwerpener Notariatsarchiven. Quellen zur deutschen Wirtschaftsgeschichte des 16. Jahrhunderts*, Stuttgart und Berlin, 1930, Neudruck, Wiesbaden, 1962. S. XXI. なお、ポルトガルの香料交易は王室による独占交易であった。この点、浅田実「商業史からみたインド航路の発見」『富山大学教育学部紀要』（A文化系）、二六号、一九七八年、を参照。
- (17) F. Prims, *Geschiedenis van Antwerpen, VII. Onder de eerste Habsburgers (1477—1555)*, 2 de boek—de economische orde, Antwerpen, 1939.
- (18) Nikolaus van Richtergeren ともいう。彼こそアフリカを回航してもたらされたポルトガルの香料を最初に買い、南ドイツへ運んだ最初の人物であった。J. Denucé, *op. cit.*, blz. 26. 彼とスウェーデン家全般については、R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, Jena, 1896, I, SS. 365—372; V. Vazquez de Prada, ed., *Lettres marchandes d'Anvers*, I. introduc-



- tion, Paris, 1963, pp. 184—185; C. Bruckner, *Zur Wirtschaftsgeschichte des Regierungsbezirks Aachen* (Schriften zur Rheinisch-Westfälischen Wirtschaftsgeschichte, Band 16), Köln, 1967, SS. 59—64, 80—81, 等を参照。
- 61 F. Prims, *op. cit.*, blz. 194—195.
- 62 エーレンベルクはレヒテルヘンが一五一五年に没したというが、次の史料に依れば、彼は一五一〇年五月から一一年一〇月の間に死去したことになる。R. Doehaerd, ed., *Études anversoises. Document sur le commerce international à Anvers, 1488—1514*, Paris, 1963, Mr. 3633, 3706.
- 63 J. A. Van Houtte, 'La genèse du grand marché international d'Anvers à la fin du Moyen Age,' in: *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 19, 1940.
- 64 フリヤックとアントワープへの間の商業覇権をめぐり闘ったこと。
- 65 *ibid.*, p. 122.
- 66 *ibid.*, pp. 122—123.
- 67 *ibid.*, p. 123.
- 68 *ibid.*, p. 124.
- 69 *id.*, 'Anvers aux XVe et XVIe siècles. Expansion et apogée,' in: *Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*, 16, 1961.
- 70 この点、一四九八年とした先きの一九四〇年の論文と違いをみせている。
- 71 *ibid.*, pp. 253—254.
- 72 *id.*, 'The rise and decline of the market of Bruges,' in: *The Economic History Review*, 2nd ser., 19, 1966, pp. 43—44.
- 73 *id.*, *An Economic History of the Low Countries, 800—1800*, New York, 1977, pp. 175—176.



第1図 三地域の銅産出額<sup>83)</sup> (単位1000ツェントナ)

的な趨勢を伝えるものでしかない。しかし、それでもこの数値によって十五世紀末から十六世紀の三〇年代までこの地域の生産額が相当に大きいものであったことが窺われる。<sup>87)</sup>

(ハンガリア・ノイゾール)<sup>88)</sup> この銅生産は十五世紀の八〇年代に一時危機的状況に陥っていたが、九〇年代に

〔銅生産〕当時の銅の総生産額を確定するデータはないが、十六世紀ヨーロッパの銅交易について新たに総合的な展望を与えたE・ヴェスタマンは、アルプス・チロル地方(中心地シュワーツ)、ハンガリア(ノイゾール)、マンスフェルト(アイスレーベン)の三主要生産地帯でヨーロッパ全体の約八割から九割の生産額を占めたと推定している。これら三地帯の銅生産額(一部趨勢)の推移を示したのが第一図である。以下これらの地帯それぞれについて少しく検討を加えておきたい。

(アルプス・チロル) まず最大の産出額を誇ったと目されるアルプス・チロル地方。ここはシュワーツ、タウフェル、ラッテンベルクの三鉱山から成っているが、後の二鉱山については産出額の推移を辿ることができない。それにこの地域に一部喰い込んでいたフッガー家等のアウグスブルクの商人によって持ち出された量が不明なため、<sup>89)</sup> チロルの銅生産の概要も知ることができない。従ってここに掲げたシュワーツの産出額(第一表)もこの地域の銅生産の部分

第1表 シュワーツ鉱山銅産出額<sup>①</sup>

(単位ツェントナ)

年 代	Alte Zeche	Ringewechsel	Falkenstein	総 額 <sup>①</sup>	総 額 <sup>②</sup>
1471年—1480年	4.684	4.096	14.196	22.976	
1481年—1490年	4.851	4.656	15.502	25.009	
1491年—1500年	4.913	5.421	16.415	26.749	27.658
1501年—1510年	5.482	5.613	17.076	28.171	29.129
1511年—1520年	5.274	5.418	18.778	30.470	31.506
1513年	5.274	5.418	14.500	25.192	26.049
1521年—1522年	5.072	5.557	21.780	32.409	33.511
1523年	5.072	5.557	24.574	35.203	36.400
1524年—1525年	5.072	5.557	20.939	31.568	32.641
1526年—1530年	5.072	5.557	16.792	27.421	28.353
1531年—1540年	4.480	5.610	14.324	24.414	25.244
1541年—1550年	3.512	4.095	13.022	20.629	
1551年—1555年	2.473	3.891	11.316	17.680	
1556年—1560年	2.473	3.891	11.117	17.481	
1561年	1.825	4.086	9.940	15.851	
1562年	1.825	4.086	8.150	14.061	
1563年	1.825	4.086	7.482	13.393	
1564年	1.825	4.086	7.950	13.861	
1565年	1.825	4.086	7.800	13.711	

注① この総額より左の4項目はウィーン・ツェントナ。

② この項目のみアントウェルペン・ツェントナ。

第2表 ノイゾール鉱山の銅・銀産出額<sup>四</sup>

年 代	銅			銀	
	総産出額 <sup>①</sup>	年平均額	ト ン 数	総産出額 <sup>②</sup>	年平均額
1494年 — 1504年	188.903	18.990	11.428,5	74.389	7.439
1504年 — 1507年	87.325	29.108	5.283,0	48.355	16.118
1507年 — 1510年	67.517	22.500	4.084,5	42.445	14.148
1510年 — 1514年	140.725	46.908	8.514,0	51.847	17.282
1513年 — 1516年	85.567	28.522	5.177,0	34.465	11.488
1516年 — 1519年	78.105	26,035	4.725,5	18.787	6.262
1519年 — 1526年	169.438	28.240	10.251,0	66.159	9.451
1526年 — 1539年	267.000	20.538	16.153,5	112.125	8.625
1541年 — 1546年	108.885	21.777	6.587,5	37.049	8.140
1546年 — 1547年	44.124	44.124	2.669,5		
1548年 — 1550年	62.607	31.304	3.850,5		
1551年 — 1563年	266.179	22.181	16.370,0		
1564年 — 1566年	48.071	24.035	2.956,5		
1567年 — 1569年	55.873	27.937	3.436,0		
1570年 — 1572年	51.173	25.587	3.147,0		
1573年 — 1575年	35.000	17.500	2.152,5		
1576年 — 1579年	38.324	19.162	2.357,0		
1580年 — 1589年	111.169	12.352	6.837,0		
1590年 — 1599年	125.874	13.986	7.741,5		
1600年 — 1604年	46.921	11.730	2.885,5		

注① 単位ツェントナ

② 単位タレント

第3表 アイスレーベンの精錬銅産出額<sup>42)</sup>

(単位ツェントナ)

年 代	産 出 額	年 代	産 出 額	年 代	産 出 額
1506年	21.948,5	1526年	41.466,6	1545年	37.436,8
1508年	24.210,5	1527年	39.683	1549年	33.535,3
1509年	21.809,2	1529年	37.641	1550年	29.431,4
1512年	27.766,5	1534年	32.131,5	1553年	21.697,9
1513年	29.098,2	1537年	28.251,4	1554年	14.970,1
1515年	28.972,6	1538年	29.281	1555年	22.331,9
1519年	30.769	1541年	25.191,8	1556年	22.927,3
1522年	28.586,5	1542年	28.357,9	1557年	20.243,7
1523年	28.274	1543年	31.929,9	1558年	24.495,8
1524年	34.117	1544年	33.740,4	1559年	26.496,3

フッガー家がクラカウのトゥルツォの助けを借りてフッガー・トゥルツォ商会 *Fugger-Thurzo-Gesellschaft* を設立し、ノイゾールに進出してくるに至って国際市場に勇躍する基盤を整えた。ところで、一四九七年から一五三九年までの時期についてはその販路別の輸出額をファン・デル・ウェーの大著によって知ることができるので(次節第二図参照)、ここでは Jozef Vlachvícs によって示された産出額を、銀の生産高と併せて示しておくことにする(第二表)。

本表によればノイゾールの銅生産は十六世紀初頭から七〇年代初めまで比較的安定した高さを維持しているが、本稿の観点からすると、とりわけ第一四半世紀、なかでも一五一〇年代のピークが——銀生産も同じ時期にピークを示す——注目される。<sup>43)</sup>

(マンスフェルト) この主要鉱山であるアイスレーベンの精錬銅 *Garlupfer* の産出額は第三表の通りである。この生産は、前のシュワーツやノイゾールと比較すると、やや後発的な動きを示しており(第一図参照)、一五二六年にピークを迎えるまで急カーブで上昇している。その後一担落ち込んだあと、再上昇し一五四五年に第二のピークを迎え、また低落するといったように生産にかなりの揺れがみられる。

「銅交易」では産出された銅は生産地からどこへ向かったのか。その目的地は、ヴェネツィア、ミラノ等北イタリア諸都市（そこからさらにレヴァントへも）、また、ニュルンベルク、ブラウンシュヴァイク、アーヘンといったドイツ内地の金属加工工業地、またスペイン、ポルトガル（そこからアフリカ、インドへ）など比較的限られていた。<sup>44</sup>

さて、銅はそのまま加工を施されるか、あるいは合金されるかして種々の製品となった。錫と合わされて青銅になり、異極鉛と混合し真鉛になったのである。<sup>44</sup> そのためいくつかの加工工業地が発展した。

主な加工工業地についてのその特色をみると次のようである。まず最大の加工工業地はニュルンベルクであつて、その真鉛加工工業はヨーロッパのどの都市よりも高度な発達を遂げていたといわれている。<sup>45</sup> アーヘンなどの真鉛工業が延板や針金などの製造に比重がおかれていたのに対して、ここの加工工業は、外から持ちこまれた延板などの半加工品が種々の商品にまで仕上げられていく点に特色があつた。<sup>46</sup> また北イタリアでは、銅貨を鑄造するナポリと、真鉛と武器を製造したミラノも目立った銅の消費地であつたが、なんといつても最大の消費地はヴェネツィアである。ヴェネツィアはその軍事工廠用と、わけても、こゝにおいて、オリエントの香料を買い入れる対価商品として銅が欠かせないのであつた。<sup>47</sup> ネーデルラントに近いアーヘンはその近傍に異極鉛山を有しており十五世紀後半以後真鉛工業が盛んとなった。やや後のことになるが一五五九年には三万ツェントナの真鉛が製造されたといわれている。<sup>48</sup>

ところでH・ケレンベントスは、イギリス、フランスやイベリア半島ばかりでなく、さらに、新たに開拓された海外の販路、特にアフリカまで含めた広汎な地域への銅の販売チャンスがアントワープで、「瞬いた」と同市場の位置を高く評価している。この市場には、中部ドイツ（アイスレーベン）とハンガリアの銅が、さらに一部はスウェーデンの銅さえもたらされて、フランクフルトの大市とも連繋を持っていたというのである。<sup>49</sup>

〔銅輸送〕では銅は誰の手によって、どのようなルートを通じて運ばれたのであろうか。当然このことは銅の販路と密接な関係をもつことであるが、グラマンは、アントウェルペンが銅交易の中心地となるまでは、チロルとハンガリアの銅はアルプスを越えてヴェネツィアへ、中央ヨーロッパの銅は北と西へ向かったとしている。<sup>60</sup>ではアントウェルペンへはどのような道筋を辿ったのか。これには二つのルートが挙げられる。

一つは、マイン、ライン両河川の水路と低地ライン地方からブラバントへ至る陸路（アーヘンからアントウェルペンへ）を併用するものであって、水路と陸路の分岐点はフランクフルト・アム・マインであった。<sup>50</sup>

この低地平野の陸上輸送を担ったのが「ヘッセンの車」Hessenwagenと当時呼ばれた車を用いた輸送業者である。<sup>60</sup>今日われわれは、この陸上輸送の実態をある程度具体的に知ることが出来、十六世紀初頭にはっきりと輸送業に専業化していた人々を確認できるのである。そのうち活動の足跡を最も多く残したリムブルクの Nout van Efferen なる人物の事跡を第四表でみてみよう。

彼は、一四九二年から一五一三年まで二一年間にわたって活動の痕跡を史料に留めており、この時代のものとしてはかなり仔細に活動の様相を辿ることができる。三〇回近い活動のうち、運んだ荷が彼自身の所有であったケースは唯一回しかなく、しかも商品所有者が様々に変っていることからして、彼が運輸業にはば専業化していたと推測することができる。扱かう商品は多様で、ケルンからアントウェルペンへ搬入した一〇回のうち七回は専らライン・ワインで、あとは香料、羊毛などが確認できる（銅も<sup>61</sup>）。ケルンへの搬出は、文書の数でいえば二二回で、droeggoed（一〇回、明ばんと毛織物がそれぞれ四回と目立つが、内容は多様である。<sup>64</sup>）しかも彼のような運送業者は例外ではない。目立つ者だけを挙げて、Frammersbach の Coenraet Coensman、アーヘンの Hans Puts と Henric Puts、それに Sittard の Godevaert van Schalonon 等の名前が指摘できる。

第4表 Nout van Efferen の輸送業<sup>53</sup>

文書起草年月日	Nr ①	行先又は 発進地	商品所有者住所②	輸送品目
1492年 6月19日 7月28日 10月18日 12月26日	628 *②683 *735 *750	ケルンへ ケルンより ケルンより ケルンより	ケルン ケルン ケルン ケルン	droeg-goed③, オリーブ 羊毛, ファスチアン織④ ライン・ワイン ライン・ワイン
1493年 5月24日	789	ケルンへ	ケルン	明ばん
1494年 5月17日 6月30日 8月9日 10月1日 10月2日	875 *915 933 966 *973	ケルンへ ケルンへ ケルンへ ケルンより ケルンへ	ケルン ニュルンベルク ケルン アントウエルベン ケルン	droeg-goed droeg-goed 毛織物 香料, ファスチアン織 droeg-goed
1502年10月31日	*1131	ケルンへ	アントウエルベン	塩
1506年 6月8日 9月28日 10月23日	1476 1510 1532	ケルンより ケルンへ ケルンより	ケルン ? ケルン	ライン・ワイン 明ばん, 毛皮 ライン・ワイン
1507年 2月3日 2月20日 " 6月11日 6月12日 7月19日 9月11日 10月5日 " "	1572 1594 *1596 *1653 1656 1683 1730 *1745 1746 1747	ケルンへ ケルンへ ケルンへ ケルンへ ケルンより ケルンへ ケルンより ケルンへ ケルンへ ケルンへ	ケルン アントウエルベン アントウエルベン ケルン ケルン アントウエルベン アントウエルベン ? ? アントウエルベン	いちじく, ぶどう にしん いちじく 甘蔗糖, droeg-goed ライン・ワイン 明ばん, 甘蔗糖 銅, 刀身 lame, 弓 塩 香料, droeg-goed droeg-goed
1508年 3月7日	*1789	ケルンより	ケルン	ライン・ワイン
1509年 7月16日 9月11日	1996 2031	ケルンより ケルンへ	ケルン 彼自身	ライン・ワイン 塩
1512年12月15日	2529	ケルンへ	ケルン	毛織物, droeg-goed, 明ばん
1513年 1月15日 " 3月2日 3月26日	2619 *2622 *2790 2862	ケルンへ ケルンへ ケルンへ ケルンへ	ケルン ケルン, アント ウエルベン ケルン, アント ウエルベン ケルン	チーズ, bucking droeg-goed 毛織物, droeg-goed 毛織物, 羊毛, 石けん, droeg-goed

注① Nr 本史料ナンバーでこれによって該当文書の検索が可能である。

② Nout van Efferen が運んだ品物の所有者の住所。

③ 内容不明。干物の類か？

④ \* の付いた運送は他の運送人と提携したことを示す。

⑤ 経糸が亜麻糸, 緯糸が綿糸の混織物。



この内陸運輸について次の三つの特徴が挙げられる。

第一、運送業に専門化した一群の人々がいたこと。

第二、彼らは主にアントウェルペンとケルンとの間の内陸の陸上運送に携さわったこと。

第三に、彼らの出身地はライン河左岸以西のマーストリヒト周辺に集中していること。

ところで同じ史料によれば (Nr 208)、一四九〇年にニュルンベルクの商人がドルトレヒトの輸送業者の手によって一五梱 *balles* の銅をアントウェルペンに搬入しており、一四九一年にもニュルンベルク商人の銅がもたらされていることが確かめられる (Nr 283) が、T・S・ヤンスマはこの銅はマンズフェルトかシュワーツのものであったと推定している。<sup>65)</sup> しかしこの史料によっても銅の輸送の事例は数多く確かめられるわけではない。とすれば、このルートを通じて南ドイツ商人が足繁くアントウェルペンを訪れたことは考えられるにしても、南ドイツ銅の主要なルートとしては考えにくい。

そこで浮かび上がってくるのが、北方海上ルートであり、ダンツイヒ、シュテッティンを経てアントウェルペンに至るルートである。ハンガリアの銅は、まずハンガリア商人の手でクラカウを経て前記プロイセンの海港にはこぼれ、ここからリュubeck へ、またさらに西方へと運ばれた。<sup>66)</sup> しかもダンツイヒから船でフッガーの銅を運んだのはホラントの船舶であったといわれるのである。<sup>67)</sup>

注 65) ケレンベントンは年産六〇〇〇トンと推定している。H. Kelnbenz, 'The organization of industrial production,' in: *The Cambridge Economic History of Europe*, V, p. 492.

66) E. Westermann, *a. a. O.*, S. 66. 但しグラフの作成の仕方は少し異なる。チロルの産出額の数字は次表の通り。S. 65. なお、ラッテンベルクは一五一五年で五、三三三、タウフェルは一五四一年で一、五〇〇（何れもシェントナ）の産出をみたという数字がある。derselbe, *SS.* 315—316.

年 代	産 出 額	年 代	産 出 額	年 代	産 出 額
1491年—1500年	33.658	1513年	32.049	1524年—1525年	38.641
1501年—1510年	35.129	1521年—1522年	39.511	1526年—1530年	34.353
1511年—1520年	37.049	1523年	42.400	1531年—1540年	31.244

(64) *derselbe*, S. 62.

(65) フッガー家のチロル鉱山への進出はやや遅れ、一五二二年に初めて鉱山と精錬所を取得した。諸田実『ドイツ初期資本主義研究』、一九六七年、九四—九八頁。

(66) E. Westermann, *a. a. O.*, S. 48. 但し一五六六年—一六五〇年の時期については割愛した。

(67) *derselbe*, SS. 46—48.

(68) 現在チェコスロヴァキア領 Banská Bystrica° A. J. Stevenson, ed., *Webster's New Geographical Dictionary*, Springfield, 1972, p. 115.

(69) 一五四六年までの銅銀産出額は、Westermann, *a. a. O.*, S. 301 に、またそれ以後の時期の銅産出額、およびトン数については、J. Vlachović, 'Die Kupfererzeugung und der Kupferhandel in der Slowakei vom Ende des 15. bis zur Mitte des 17. Jahrhunderts,' in: *Schwerpunkte*, S. 171. に依る。後者には前者と重複する時期の産額も載っているが両者に相違はみられない。

(70) 両者の提議については、諸田前掲書、九九頁以下参照。但し、本稿の観点からはこれをフッガー商会そのものと考えて差し支えない。E. Westermann, *a. a. O.*, SS. 50—51.

(71) 輸出額も同じ傾向を示す(第二図参照)。

(72) *ibid.*, S. 302.

(73) *derselbe*, S. 42; K. Glamann, 'The changing patterns of trade,' pp. 243—244.

(74) H. Kellenbenz, 'Europäisches Kupfer,' S. 321.

(75) E. Westermann, *a. a. O.*, S. 38.

(76) *derselbe*, S. 39.

(77) *derselbe*, SS. 39—40. もとより中東アフリカ人を介しての交易である。L. Schick, *Un grand Homme d'affaires au début*

du XVI<sup>e</sup> siècle. Jacob Fugger, Paris, 1957, pp. 276 ff.

(48) E. Westermann, *a. a. O.*, S. 41.

(49) H. Kellenbenz, 'Europäisches Kupfer,' SS. 335—336.

(50) K. Glamann, 'The changing patterns of trade,' pp. 243—244.

(51) ここが分岐点となったのは水路での通行税の高さが問題になったからだという。F. Prims, *op. cit.*, blz. 153. 陸上交通網の詳細については、R. Doehaerd, *op. cit.*, I, pp. 274—275 の地図を参照。

(52) F. Prims, *op. cit.*, blz. 153; J. Strieder, *Aus Antwerpener Notariatsarchiven*, SS. XXV-XXVI. このグッセンの車馬という明示はされていないが、グラマンは銅の陸上輸送に当った事を、○・ハトン荷重の四頭立て馬車だったといっている。K. Glamann, 'The changing patterns of trade,' p. 242.

(53) R. Doehaerd, *op. cit.*, の史料集による。ここで依拠する証書文書 *certificats* (この史料集にはスーペーン文書 *schepen-brieven* (*lettres échevinales*) も収録) はスーペーン *schepen* (アントワープ市参事会員) の前で申告・証言によって作成された文書で、商取引行為について、商人出身地、運送人名、商品名・産地・分量・価格・包装、目的地、等々が記されたもの。

編者は、この史料の性格について、「ネーデルラントの産物やそこを通過する産物の分配に携わる商人の活動の全姿容」を伝えるものではないが、政治的な状況を考慮しなければならないような危険性の大きい分野、つまり運輸の分野では商品の所有を確定することが必要であるという。つまり敵側(フランドル都市など—引用者)陣営所属の物品として押収される危険を防ぐために。

そこで筆者は、シェトリリーダーの見解もふまえて (*Aus Antwerpener Notariatsarchiven*, S. XXIV)、『本史料を、ヘブスブルク家領を通航する商品の出入についてはかなりの信頼をおくことができる』と考えた。絶対的な取引量を知るには適さないが、少なくとも記述された取引の存在は確かなものであったとし、それによって取引の方向や性格を知ることにはできると考えるのである。Doehaerd, *op. cit.*, I, pp. 9—25.

この史料に専ら依拠してなされた個別研究について筆者の知る限り次の三つがあるが、何れにおいても史料の性格吟味がなされていない。E. Pitz, 'Kapitalausstattung und Unternehmensformen in Antwerpen 1488—1514' in: *Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 53, 1966; W. Brulez, 'Brugge en Antwerpen in de 15<sup>e</sup> en 16<sup>e</sup> eeuw: een tegenstelling?,' in: *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 83, 1970; H. Pohl, 'Köln und Antwerpen um 1500,' in: H. Stehkämper, hrsg., *Köln, Das Reich und Europa. Abhandlungen über weiträumige Verflechtungen der*

*Stadt Köln in Politik, Recht und Wirtschaft im Mittelalter*, Köln, 1971.

③ 十六世紀中頃のヨーロッパの銅の流通と銅の産出地について W. Brulze, 'L'exportation des Pays-Bas vers l'Italie par voie de terre au milieu de XVI<sup>e</sup> siècle,' in: *Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*, 14, 1959, 参照。

④ T. S. Jansma, 'Hanze, Fugger, Amsterdam,' in: *Bijdragen en Mededelingen betreffende de geschiedenis der Nederlanden*, 91, 1976, blz. 7, n. 23.

⑤ *ibid.*, blz. 6, 10.; W. Stark, *Libeck und Danzig in der zweiten Hälfte des 15. Jahrhunderts*, Weimar, 1973, SS. 129 ff.; L. Schick, *op. cit.*, p. 281; J. Vlachovik, 'Produktion und Handel mit ungarischem Kupfer im 16. und im ersten Viertel des 17. Jahrhunderts,' in: I. Bog, hrg., *Der Aussenhandel Ostmitteleuropas 1450—1650. Die ostmitteleuropäischen Volkswirtschaften in ihren Beziehungen zu Mitteleuropa*, Köln und Wien, 1971, S. 605.

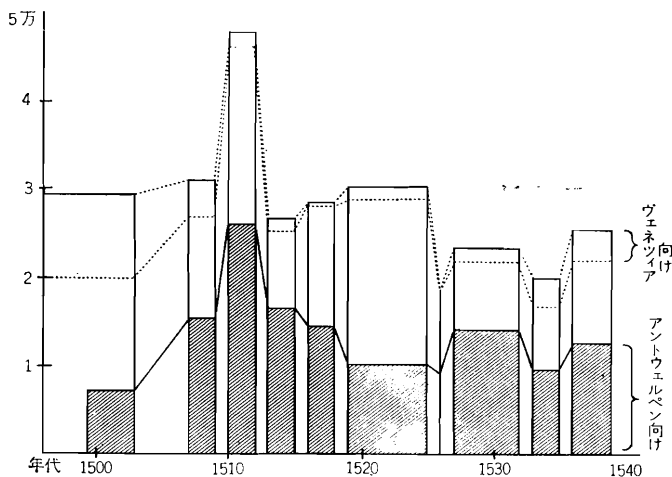
⑥ T. S. Jansma, *op. cit.*, blz. 14.

### 三

以上、一節で研究史の概要を辿り、二節においてヨーロッパ銅の生産と交易の実態を概観したので、最後に、アントウェルペン市場での銅・香料交易の結合の様相を新しい研究成果も取り入れつつ確認と補正を行なっておきたい。

まず、アントウェルペンのフッガー・ハンガリア銅の流入をみることにしよう(第二図参照)。みられるように、ノイザール産の銅は、十六世紀への世紀交替期頃からその主要な販路をヴェネツィアからアントウェルペンに切り換え始め、十六世紀に入るや、<sup>60</sup> 全面的に転換しているのである。この動きと同じようにハンガリアの銀も一四九七年から一五〇四年の時期に、ヴェネツィア向けを上まわる量がフランクフルトとアントウェルペンへ向けて送り出されているのである。<sup>61</sup>

一体、これほど突如として銅の販路を大転換させた契機は何に求められるのであろうか。まさしくこの契機こそこ



第2図 フッガー・ハンガリア銅の販路<sup>64)</sup>

れまで検討してきた銅と香料の結合というテーマの中に求めなければならない。ここでは、諸研究を集大成したファン・デル・ウェーの所説に従がいつつ、他の研究をも考慮に入れて総合的に考察することにする。

アントウェルペンに、アフリカを回航したポルトガルの胡椒が最初に陸揚げされたのは一五〇一年八月のことであった。<sup>65)</sup>一五〇三年以降このポルトガルの香料の到着が次第に本格化していき、一五〇四年には約二、〇〇〇キンタルの胡椒が同市場で販売され、一五〇八年―一五一〇年には三、〇〇〇キンタル、一五一〇年代の初めには八、〇〇〇キンタルもの胡椒が売られた。<sup>66)</sup>そしてこれに伴なって胡椒価格は低落していった。こうして、「ポルトガル香料の競争力ある価格の勢いがきわめて強く、そのためイタリア香料にとってはアントウェルペン市場の屋台骨をまたく間のうちに掘り崩してしまうほどのものであった」。<sup>67)</sup>そしてファン・デル・ウェーは、「銀銅に対するポルトガルの需要の高さがポルトガルと南ドイツ商人との緊密な商業同盟 commercial alliance の広大な地盤を作った」といって、

この同盟が本節の初めに挙げたハンガリア銅の動きによって証明されていると断定するのだ。つまり、ポルトガル王室が香料交易を営なむ資金に窮迫していたことが、それまでヴェネツィアによって利益のあがる銅交易をはばまれていた南ドイツ商人に商業・金融双方の分野で広大な活動の素地をアントウェルペンで与えたのである。<sup>65</sup>こうしてポルトガル王室と南ドイツ商人は、銅Ⅱ香料交易において堅く結びついたのであった。この点でポルトガルの香料交易のピークとハンガリア銅交易のピークが一五一〇年代中頃で一致しているという事実はきわめて示唆的なものである、といえるであろう。

さらにファン・デル・ウェーは、その史料渉猟の過程で、額の程度は定かでないが、初期の時期（一四九七年—一五〇四年）にフッガーのハンガリア銅を大量に買い付けた人物としてあのスヘッツ家を見出しているのである。<sup>66</sup>

エラスムス・スヘッツによってその跡を継がれたニコラス・ファン・レヒテルヘン（一節の Claes van Rechtersem）は、アーヘンの出身で十五世紀の八〇年代にアントウェルペンへ進出しており、出身地との関係も保って異極鉱山の経営を行っていたが、同時に同市場へ移住後ポルトガル交易にも手をのばし、前述のように、ポルトガルによってもたらされたインドの香料を、銅・真鍮製品と引き換えに買い入れた最初の一人となった。こうして彼は、ヴェネツィアからアルプスを越えて運ばれてきた高価な輸入品、わけでも胡椒の販売に対して絶大な優位を獲得するに至ったのである。そして彼は、とりわけ勃興期にあったアーヘンの真鍮工業製品をイベリア半島へ向けて販売し、十六世紀初頭にはヤーコブ・フッガーとさえ交わったのであった。<sup>67</sup>ともかく、こうしてわれわれはアントウェルペン市場での銅Ⅱ香料交易の接点を確認したのである。

<sup>65</sup> H. Van der Wee, *op. cit.*, I, pp. 522—523. このアントウェルペン向けの数値は、「アントウェルペン向けの販売」と明記されたもののみの集計であるので、他処を経由してアントウェルペンに再送付された部分は含まれず、アントウェルペン

へ、実際の輸送量はこれより高かったと考えられる。

- <sup>63</sup> J. Vlachović は、ハンガリア銅の販路を論じて、十五・十六世紀交替期に販路の大転換があったことを指摘し、あわせて十六世紀の七〇年代までアントウェルペンがハンガリア銅の最大の輸出先であったとしている。id., 'Produktion und Handel', SS. 604—607.

- <sup>64</sup> ヴェネツィア向けが二五・五九九マルクで、後者は二八・四七三マルクであった。H. Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 125.

- <sup>65</sup> H. Van Werveke, *Bruges et Anvers. Huit siècles de Commerce flamand*, Bruxelles, 1944, p. 54. 但し、ホルストは一五〇三年とつづね。W. A. Horst, 'Antwerpen als specerijenmarkt,' in: *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 51, 1936, blz. 333. 最近の研究は一五〇一年説を確証しつつある。J. N. Ball, *Merchants and Merchandise. The Expansion of Trade in Europe 1500—1630*, London, 1977, p. 143.

- <sup>66</sup> W. A. Horst, *op. cit.*, blz. 333—336; H. Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 127. なお、ファン・ハウテは、一四九五年から一五二一年の期間（マヌエル大王治世）に、ポルトガルからアントウェルペンへ、一〇〇万リール余の胡椒、一七・二五〇キロの甘蔗糖、四万リール肉桂が搬入され、これに対して五・二〇〇トンの銅鉱石と、一・二五〇トンの金属製品が帰り荷としてポルトガルへ流れたとみつつある。J. A. Van Houtte, 'Anvers aux XVe et XVIe siècles,' p. 254.

- <sup>67</sup> H. Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 127.

- <sup>68</sup> *ibid.*, p. 128.

- <sup>69</sup> 両者の関係には、ポルトガルが南ドイツ商人に完全に緊縛されるのを拒み、自らの手で香料交易の独占的支配を達成しようとする動きがみられたことも事実である。ポルトガルは、一五〇八年から一五二五年まで、クレモナの Affaitati 家に香料の専売権を売ったことはこの点に関わる（Affaitati がヴェネツィア、ミラン、ジェノヴァといった有力な商業都市の出でなう点に注意された）。*ibid.*, pp. 129f.; J. Denucé, *Inventaire des Affaitati Banquiers Italiens à Anvers de l'année 1568*, (Collection de Documents pour l'Histoire du Commerce, 1), Anvers, 1934, pp. 19—26.

- また、アントウェルペンが外来商人に対して積極的に市場を開放する姿勢をとったのに対して、ヴェネツィアは外来商人相互間のもとより、外来商人と自市民間の直接取引をも厳しく禁止・規制したという両市場間の外来商人に対する際立った政策の相違もこの販路の転換に大きく与ったと推測できる。H. Simonfeld, *Der Fondaco dei Tedeschi in Venedig und die Deutsch-Venetianischen Handelsbeziehungen*, Stuttgart, 1887 SS. 30—31, 103—106, 大塚前掲書、三四—三六頁。

<sup>(6)</sup> H. Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 126.

<sup>(7)</sup> C. Bruckner, *a. a. O.*, 59—61. なお、スハッツ家はその後十六世紀の進展するにつれて、アントウェルペンの運命と軌を一にした数奇な運命を辿ってゆくことになる。

## むすびに

これまでみてきたように、様々な経緯をもちつつ、十五・十六世紀の交替期に、銅・香料交易がアントウェルペン市場において結びあわされてきた。まさしくそれは同市場の興隆の一大局面を色彩り、ヨーロッパとアジアを結ぶ一筋の長い航跡の一環として組みこまれたものであった。そしてその最大の結節点が唯一点の地に集中していたことは、バランスを重んじる今日の思考からすれば理解を絶するほどのものであったことも、みてきた通りである。<sup>(8)</sup>

だがしかし、このいわば求心的・首都的市場がヨーロッパ各地の金属加工業の下支え、内陸陸上輸送と北海・バルト海交易などの網の上に立って、従ってまた大きくは国際交易の動きに深く規定されて生起・存立していたことも知ることができた。その意味でアントウェルペン市場は、決してヨーロッパ経済に超然としていたのではなかったといえるであらう。

注<sup>(8)</sup> 交易実態の特異な相貌を検出したものとして次の拙稿を参照されたい。「アントウェルペン国際商業の一断面——一五六七／八年 ロンドン・ポートブック分析——」『社会経済史学』、四四の一、一九七八年。

(本稿は一九七八年度科学研究費補助金(総合研究A・代表者・竹内啓一)による研究成果報告の一部である。)